
俺たち悲しき中学生

レイシス・ヴィ・フェリシティ・煌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺たち悲しき中学生

【Nコード】

N9309Y

【作者名】

レイシス・ヴィ・フェリシティ・煌

【あらすじ】

あらすじ？

そんなものはない！！

ただ適当に書くのみだ！！

公民館といえば・・・。（前書き）

思いついたことをつらつら書くだけのユルグダ小説ですので、暇なときに読んでください。
一話短め。

公民館といえば・・・。

＊公民館＊

俺の名前は日真田洋介。
ひまだようすけ

中学二年生であだ名は《暇人》！！

そんな悲しい俺は今、ダチ3人と公民館に来ているわけですが。

「で、結局何しに来たわけ？」

「「「さあ・・・」」」

無気力な声が重なってしまった・・・。

「とりあえず何するか決めようよ。俺は卓球がいい。」

公民館といえば卓球だ。

これならみんな納得してくれるだろう。

「おいおい何を言ってるんだいその暇人よ。」

こいつはダチ1号。あだ名は《金髪》。

「ふ・・・。全くだ。」

続いてこいつはダチ2号。あだ名は《ナルシ》。

「金髪とナルシの言うとおりだぜ、暇人。」

（前略）あだ名は《鼻毛》。

「で、何が言いたいわけ3人とも。」

「「「そりゃあ、公民館といえば・・・なあ？」」」

「公民館といえば？」

「スカート捲りだろ」「ゲームだろ」「小銭探しだろ」

・・・。

「そこは揃えろよ！！」

なに今の、てか最後の悲しすぎないか・・・。

「んじゃあ、スカート捲りから説明願おう。誰だコレ言ったの」

「俺だ。」

ナルシ。

「お前かつ！・・・んで、君いたいいくつだと思ってるんだい？」

「2年生・・・。」

「中学だろだろうが！」

あ、やばい。ナルシの目が血走った・・・。

「心はまだ小学2年生なんじゃ！スカート捲りは男のロマンだ！文句あるか！！」

なんだよそれ・・・。

「脳みそが小学生並だと認めるのなら許してやろつ。」

「うっ！」

ナルシがすねた。

一人脱落。

「次、ゲーム言ったヤツ。」

「ああ、それ俺だ。」

金髪。

「まあ、現実的だからいいとする。だが、ゲームがしたいなら一人でテト〇スやってろ。」

金髪がすねた。

二人脱落。

「はい、一番悲しいヤツ。」

「・・・。」

「うん、もうわかってるから・・・。」

「・・・そういえば昼ドラが」

「関係ねーだろー！！」

「う・・・。」

「しゃあない、金が欲しいのは分かった。ほら、取ってこー~~~~~
くいー！！」

俺は公民館のそばの田んぼにチップを投げた。

あ、もちろんゲーセンのコインだけど。

しかし、ほんとに金欠だったらしい鼻毛は、6月の田んぼにダイブした・・・。

鼻毛が消えた。

3人脱落。

「さあ、帰るか・・・」

END

終業式（前書き）

訳の分からないまま第二話突入っすよw

終業式

「じゃあみんな、夏休みは気を付けて過ごすように。解散!」

先生の一言で一気に教室がざわつく。

俺も鼻毛たちのもとへ向かった。

「鼻毛、俺たちも早く帰ろうぜ。」

「だな・・・」

4人で教室を出て、靴箱に到着した。

靴を出しながらナルシが、

「今年の夏休みは10人くらいナンパしよう!!」

と、訳の分からない抱負を語っていたのだが、全員に無視された。

学校を出て海沿いの道を歩いていると、異様に大きな空き缶が転がっていた。

「これ、デカくないか？」

金髪の意見にみんな同意のようだが。

「山本の頭くらいはあるんじゃないかこれ？」

「いや、ヤツの頭はコレの1.5倍はある。」

・・・。

・・・。

・・・。

「よし、蹴って帰ろう。」

ナルシが突然つぶやいた。

「おまえ、10分考えてそれかよ。」

とか言いながらもみんな蹴って帰ることになった。

20分ぐらい経っただろうか。

かなり夢中になっていたらしい。

「あ、カバン・・・。」

ナルシが思い出したようにつぶやいてみんな我に返った。

「さっきのどこだアア！」

いや、遠くね？

俺カバン持つてるし……。

「じゃあお前らいつてらっしやい。俺ここで待つてるから。」

「ま、いつか。じゃあ暇人、ここで待つてろよ。」

さらに30分。

走ったらしいので往復でもそのぐらいだ。

しかし

「あれ、お前らカバンは……」

なぜかカバンがない。

「犬に持つてかれた……」

と、金髪。

「俺たちの目の前で……」

と、鼻毛。

「山に逃げていった……」

と、ナルシ。

……。

……。

……。

「ん？」「ん？」

「いや、ん？じゃなくて、なんで戻ってきた！……！」

探して来いよ。

「だって山怖いもん。」

「キモッ……」

一瞬ナルシがカマに目覚めたかと……。

次の日3人にメールしたら、カバン（AV入り）は交番に届いてたらしい。
補足すると、拾ったのは犬じゃなくてA組の山本だったらしい・・・。

終業式（後書き）

今回も、結局何が言いたいの！？

って感じてしたねww

じゃあまた次回でwwww

扇風機（前書き）

僕は死にましえん！！

（あゝはい。スルーしてね^^^）

扇風機

「あゝあゝあゝ怠い…。」

俺は今扇風機から5cmのところにいる。

夏休みに入って、宿題も何もやらぬまま3日が過ぎた昼下がり…。

部活に入っていない俺にとっては暇で仕方がない時間帯だ。

テレビをつけても昼ドラだのニュースだのと、興味のかけらもないものばかり…。

(ガチャ)

あ、帰ってきた…。

最悪だよもう…。

「ちよつと、どきなさいよね!」

あゝ…。

「はいはい、今どくつて…。」

「早くしてよっ!」

(ドスツ)

あ、この鈍い音は俺の右腹部が逝った音です^^

「っ痛!蹴ることねーだろ…。」

「うるさい!あんたがとろいのが悪いのよ!」

んな勝手な…。

「あゝ。うゝ。涼しいゝゝゝ。」

一応紹介しとくと、これは一つ下の妹で、あだ名《残虐の魔女》。

今では略して《魔女》として定着している。

由来はお分かりの通りです…。

「てか、俺の兄貴としての威厳はどこえやら…。はあ…。」

俺がつぶやくと。

「あゝ、何か言った?」

こうなったらどうしようもないからなあ…。

仕方ない、少し暑いが俺の部屋に行こうか…。あそこなら扇風機も

あるし…。

「なっ……。」

扇風機オーバーヒート中…。

「俺の快適ライフがアアアア！」

「うつさいー！」

くそ…。こうなったのも全部アイツのせいだ。
少し兄として優位な体制にいなければ…。

ドタドタドタ…。

ガシャツ。

「おい魔女。そこ変われよ。」

「はあ？なんであんだみたいな塵蟲に空け渡さないといけないのよ！」

「つく…。上の扇風機壊れてるんだよ。」

ここは冷静に…。

「知らないわよ。エアコンでいいじゃん！」

「この家にエアコンはない…。」

「あんたがケチるからでしょ！この牛糞！…」
なっ…。

（カツチーン）

「誰が牛糞だ！歩く肥溜めが…！」

「何ですって！？もっぺん言ってみなさいよ！」

「そんなに言ってほしいのか（笑）、なら何度でも言ってやる。歩く肥溜め！腐れビッチ！まだまだあるぞ。高飛車猥褻物！異界の愚魔女！貧乳のくせに生意気だ！」

はあ…。

はあ…。

はあ…。

どうだ…。

「……………」。

あれ？

魔女は俯うつむいてプルプル震えているだけで、何も言わない。

もしかして泣ないてる…？

いやいやそりゃないよ……………ね…？

ピクッ！

「どおりやアアアア！！」

やっぱりか！！

いきなり殴りかかってきやがった。

俺も応戦する…。

……………。

何分ぐらい経っただろうか…。

結局決着はつかずじまいだった…。

しかし、失ったものは多数ある。

・机の脚、一脚

・椅子、半壊

・箒たんす筥、扉が取れた

・床、所々（田所）穴が開いた

・一階の扇風機…全壊

「明日から夏休みどうすればいいんだアアアアア！！」

扇風機（後書き）

妹（か弟）欲しいなーとか思ってるけど、怖いね…。
自分で書いというてなんだけど…。

いや、大丈夫。

現実の娘はそんなじゃない筈・・・

ベットの下には・・・(前書き)

期末終わったWWW

ベッドの下には・・・

というわけで、扇風機のない暮らしに耐えかねた俺は今、ナルシの家に来ています。

「あゝ涼しい〜〜〜」

どう思いますかみなさん。

この部屋クーラーついてますよ。

最近の中学生は裕福なもんだねえ…。

（おまえも最近の中学生だぞ…。）

「なあ暇人、本当に泊まるのか？」

「当たり前だ、こんな裕福な暮らしをしている貴様には庶民の苦しみなど分からんだろうがな！」

「何で逆ギレ…。」

それにしても…。

きれいだなあこの部屋。

「なあナルシ。どうやってたらこんなに片付くんだ？」

気になる…。

「ああ、これ親にやってもらってる…。」

（ムカツ）

「自分でやんないの？」

「まあ、やってくれるっていうから…。」

（ムカツ）×2

「へ、へえ…。ナルシの親って几帳面なんだ…。」

「いちいち片づけに来るなんて鬱陶しいくらいだよ…。」

（ムカツ）×3

「隅から隅まで片づけてくれるの？」

「いやあそうでもない。やるなら最後までやれってんだよな…。」

（ブチッ！！）

「そう…だね…。」

「まあ、そのおかげでベットの下のエロ本は見つかっていないけどね。」

ん…。

あ、そうだ!!

(キュピーン!!!!!!)

次の日の朝…。

「やっぱ、お世話になるのも悪いんで、帰ります…。」

俺は、ナルシが起きる前に部屋を出て、ナルシ母に告げた。

「そつ。分かったわ、気を付けて帰ってね。」

ふっ…。

ここまでは順調…。

「あ、そつだ。アイツの部屋、キレイだったんだけど何故かベットの下だけ異様に汚れてましたよ。」

さあ、どう出る!?

「まあ、そつなの? そついえばベットの下は手えつけてなかったわねえ…。」

そして少し悩んだような顔をして、

「それじゃ、今度あの子がいないときに、大掃除でもしようかしら。」

と。

よっしゃー!。作戦、大・成・功!

クッククク…。

裕福にしている罰だ。

そつ、これは天罰なのだ!!

3日後…。

昼飯を食い終わった頃に、ナルシから一本のメールが入っていた。

「いろいろあつて家に居づらくなつたんで泊めてくれないか…？」

」」

だつてさ…。

「H A H A H A H A H A！ざまーみろだ！！」

いやあ、悪を成敗するつて気持ちいいねえ。

（注：悪質なのはお前だ…。）

「キモっ。何いきなり笑つてんの…。」

うっ…。

次はこいつもどうにかせねば…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9309y/>

俺たち悲しき中学生

2011年12月1日21時48分発行